



東北ヘルプ° ニュースレター

2023年 イースター号

巻頭言	1～2頁
愛と希望のコンサート 報告	3頁
「街の牧師」の可能性	4～9頁
「雄勝」の壁の前に立って	10～18頁
追悼：似田貝さんのバトン	19～20頁
風化に抗うために1： 「福島」の記憶 写真展を	21～24頁
風化に抗うために2： じんのあい『星の輝き、月の影』 完結	25頁
会計報告	26頁



巻頭言

2023年度の「東北ヘルプ」ニュースレターをお送りします。

1.

今回のニュースレターは、「雄勝」を中心に置いて構成しています。「雄勝」というのは、多くの漁港を持つ半島で、「日本一美しい漁村」とも呼ばれ、古くから硯石を特産としてきた町です。2005年の「大合併」の際、石巻市の一部となりました。伊達政宗が西欧へと使節団を送った「慶長遣欧使節」の黒船がここで建造された、とも伝えられており、キリシタンの伝承も残された土地です。2011年3月11日の津波では「全体の7割に当たる1100世帯」が甚大な被害を受けました。そしてその後、いったいどうなったのか——この町を見ますと、3.11被災地の「今」がよく見えてきます。同時に、日本の現実も、そこに、よく見えてきます。



そして、その「今」の矛盾と理不尽の中に、しっかりと立ち続ける「若い世代」がいます。その人々の息遣いを、今回のニュースレターの中心に据えました。美しい雄勝の風景と共に、ご高覧いただければ幸いです。



「雄勝」が照らす光の中で見てみると、日本の現実の矛盾が詰まった「原子力災害被災地」もまた、輪郭をはっきり示してくるようになります。社会問題一般ではなく、政治問題でもなく、一人ひとりの生活と生業（なりわい）が織り込まれた問題として、原発被災地を見ること。それを伝え合い、語り合うこと。その広がりが、きっと、「遠くから届く星の光」のように、後の世代のための灯になる。そんなことを思わせる対話が、このニュースレターに掲載されていると思います。

そして、その「星のような光」をつなげて行こう！と、いつも元気に呼びかけてくださる方が、おひとり、2023年3月6日に、逝去されました。似田貝香門さんでした。私たちは似田貝さんからも、たくさん、深く、学ばせていただいたのです。その思いを「追悼文」として、本号に収録しました。



似田貝香門さん
（岩手沿岸部で
なぜか逃げない小鳥を
撫でていました。）

2.

東北ヘルプは、3月18日に「13年目」に入りました。各地で行われた「12年の追悼」あるいは「13回忌」の集いに合わせて、私たちも、三つの催事のお手伝いをしました。

一つは、「宮城三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会」です。その詳細を、中澤理事が本号に寄稿くださいました。

二つ目は、「福島県キリスト教連絡会 (FCC)」の記念会でした。それは3月7日(火)に須賀川シオンの丘で行われました。「ニュースレター」2022年夏号でご紹介した「プーさんプロジェクト」の最新のご様子も、拝見することができました。



三つ目は、「石巻広域ワイズメンズクラブ」の「追悼礼拝と感謝の集い」でした。日本基督教団石巻栄光教会礼拝堂で行われ、「感謝の集い」では原発被災者・母子避難者の物語を伝える「震災絵本」の読み聞かせが行われました。



左 上 FCCの記念会
上 シオンの丘の「蜜蜂」巣箱
左 石巻広域ワイズメンズクラブの追悼礼拝

3.

12年間を振り返り、13年目の被災地に立って、「東北ヘルプ」がいまだに続いていることを、奇跡的なことと、感謝しています。それは、人と人がつながる奇跡です。それは、全国から「3.11」の被災地へ、そしてさらに、「3.11」の被災地から全国へとつながっています。今回は特に、岩手県と熊本県で「街の牧師」となられたお二人に、お話を伺いました。それは「つながって行く」ことの確かな力を、私たちに知らせる対話となりました。

巻末にある会計報告を、ぜひ、ご覧ください。いまだに、このように、支援してくださる方がおられますことに、感謝を深めます。東北ヘルプは、「仙台キリスト教連合」が建てた団体です。宗教の気配を、私たちは消そうと思いません。それで、公的な補助金などは、ほとんど、頂くことができないのです。そしてさらに、私たちは「支援者を支援する」団体です。「支援者」への募金と比べますと、「支援者を支援する団体」への募金は、一般に、集まりにくいとされています。その二つの困難にもかかわらず、私たちは12年間も活動を続けることが許されました。それは、やはり、奇跡的なことだと思うのです。

そのつながりに、私たちは責任を感じます。何とかして、みなさまの思いを具体化した。そのためにできることは何か。ずっと考え、試行錯誤してきました。必要となれば、法人を設立し、人をお雇いし、あるいは事務所を構え、放射能計測所を設置しました。そして、時期が来れば法人を改組し、お雇いしていた方々に感謝を覚えつつお辞めいただき、あるいは事務所を縮小し、放射能計測所も移転してまいりました。



2023年3月、「仙台放射能計測所・いのり」は、福島市へと移転しました。仙台市内にあった最後の「大きな施設」でした。いよいよ、これから「現場」に力を集中できると、小さな感慨を覚えています。

そして新しい放射能計測所が、福島市で始まります。今、その準備を進めています。備品は搬入されました。これから、ボランティアの計測員を養成する「講習会」を開催し、そして「開所式」をいたします。



左 上 福島食品放射能計測所の計測室
片づけられた
仙台食品放射能計測所の計測室

「福島市放射能計測所・いのり」の開所式は、6月16日午後を予定しています。

場所は「福島市放射能計測所・いのり」

福島市笹木野小針尻 23 - 20 (旧 基督兄弟団 福島教会礼拝堂) です。

「仙台食品放射能計測所・いのり」内にあった東北ヘルプ事務局は、

同じ敷地内の「日本基督教団東北教区センター・エマオ」内に移転となります。

このニュースレターが、「つながって行く」ための手立てとなり、私たちみんなの「現実」を共有する一助となれば、まことに幸甚に思います。

(2022年3月21日 川上直哉 記)

愛と希望のコンサート 報告



東北ヘルプ理事 中澤達生
(基督聖協団仙台宣教センター 宣教師)

未曾有の震災から今年で12年となりました。

毎年行なってきました「宮城三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会」(以下「追悼会」と記します)でしたが、もう3年も、「コロナ」感染拡大のため、集まってのセレモニーを中止する他ありませんでした。私たちはその代わりに「ネット配信」を行いました。なんとかして、被災地の現状を全国にお伝えし、「忘れない」というメッセージを共有していただきたく思っていたのでした。それは被災地からの「愛と希望のコンサート」と題して、今でも Youtube でご覧いただけると思います。



2022年のビデオは左のQRコードからご覧いただけます。



気仙沼まち・ひと・しごと交流プラザ

そして今年です。ようやく、気仙沼市内の湾岸にある「気仙沼まち・ひと・しごと交流プラザ」という施設をお借りして、「まごころをあなたに」と題して、集まってのセレモニーを開催することができました。震災落語から始まり、ハープ演奏、そして「愛と希望をメッセージとするゴスペルソング」を提供しました。サイレンが鳴る2時45分には献花と祈りを海に向けて献げ、最後に「花は咲く」をみんなで歌いました(その様子は「宮城三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会ホームページ」よりご覧頂けます)。素晴らしい会場に、100名ほどの方が集まり、とても良い時を過ごすことができました。



ホームページは左のQRコードからご覧いただけます。

この追悼会は、孤独やストレスを抱える人々にとって、心の支えとなるものとなればと願って企画され2012年から開催されてきました。被災地の人々の関係や信頼を深めることを目的としています。この催事を続ける中で、確かな手ごたえを感じることがあります。それは「被災地で活動続けるクリスチャンネットワーク」が成熟している、という事です。

まず、追悼会に参加するクリスチャンたちは、教会ではなく公共施設を活用することで、より多くの人々が参加しやすい環境を作らなければなりません。そして、このような大きな催事を成功させるためには、地域の人々のご理解と、全国の方々のご支援が不可欠でした。そのようにして、「キリスト教の世界」の外との関係をどう取り結ぶかを、私たちクリスチャンは深く学ばせていただいているのです。



会場からは気仙沼の新しい港が見えます

そして、追悼会を実現するためには、多くの人々の献身的な働きが必要です。スタッフやアーティスト、地元のボランティアたちは、経済的な負担や時間的な制約などを乗り越えて、追悼会を実現するために尽力してくださいました。その努力があって初めて、追悼会を開催することができるのです。本当に様々な方々が、たくさん、この追悼会を実現するために、多大な努力をなされ、協働されたのでした。そのようにして、「キリスト教の世界」の中にある様々な違いを乗り越えて、私たちのネットワークは成熟してきたのだと思います。

改めて、この場を借りて、この働きを覚え、ご支援いただいた皆さまに心から感謝とお礼を申し上げます。

(了)

311を忘れない

愛と希望のコンサート2022

～まごころをあなたに～

3月11日(土)

開場 12:30
開演 13:00-15:00

気仙沼まち・ひと・しごと交流プラザ
〒988-0016 宮城県気仙沼市南町1-11

入場無料

～出演者～
落語家ゴスペル隊マイワロ
神山みさ
キャッチャーポーター
HOPEN

YouTube 配信予定

主催：宮城三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会

「街の牧師」の可能性

——釜石と熊本から——

東北ヘルプ 2022 年夏号の 3 頁以下に、「釜石から『街の牧師』として:高橋夫妻インタビュー」という記事を掲載しました。多くの方から、反響を頂きました。

「社会福祉協議会（社協）」でのお仕事の中で「牧師」としての務めにまい進する。そんな高橋和義先生と同様に、熊本県人吉市の「ともしび聖書チャペル」牧師の松崎義治先生もまた、「熊本水害」の被災地で社協職員として働いておられました。また松崎先生は少年院で「教誨師（きょうかいし）」としても、牧師の務めに当たられていました。そうした中で見えているものは何か。お二人に、オンラインで集っていただき、じっくりと語っていただきました。

（聞き手：川上）

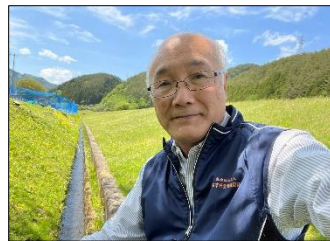


1.

——まず、お互いに自己紹介をお願いします。

高橋先生：

岩手県釜石市で働きを展開してきました。J E C A (日本福音キリスト教会連合) という福音派の一つのグループの教会で信仰を与えられ、洗礼を受け、神学校へ行って牧師になりました。30 年ほど、東京圏の牧師をし、hi-b.a. (高校生のためのキリスト教の伝道団体) でも働きました。



2011 年 3 月 11 日以来、東日本大震災と向き合っています。東北に興味を持ったこともなかった私でした。被災の日は帰宅難民になり、翌日家に戻ってから何が起こったかニュース映像で知ったのです。その時、牧師としての転換期にいた私は、時間をかけて祈りました。そして 2012 年、岩手県釜石市に、宣教団体 OMF (国際福音宣教会) の支援活動「いわて支援プロジェクト」の働き人として赴任しました。2 年後、それが J E C A の岩手開拓伝道に引き継がれました。私は合計 4 年間、支援と伝道の働きに従事しました。

その責任が終わった時のことです。まだまだ仮設住宅にお住まいの方が多く、「引き上げる」ことが考えられなかった私に、釜石の社会福祉協議会（社協）

からお声がけを頂きました。それ以来、「コミュニティーの再再生」という現場に立つことになったのです。「ここからが本当の復興なのだ」と思いました。

実際、橋や道路などは、どんどん完成していった中で「コミュニティー」という課題はとても時間のかかる課題に見えたのです。その部分を担ってほしいと頼まれました時、「破れをつくろう」という福音の仕事に就くことができたと感じました。人が、破れている。自分自身とも、家族とも、地域とも、つながれなくなっている。その現場に立つことは、福音的な働きと思ったのです。その重要性を思っ、社協で働いてきました。もうその仕事も 7 年を数えることになりました。「住民の交流とコミュニティーの再生事業」「復興住宅の自治会形成」という仕事です。そして、さらに「生活支援コーディネーター」の仕事が加わってきました。地域課題を見つけ、地域資源につなげて解決を図る仕事です。特に高齢者の介護予防が中心的な役割でした。

実はこの 22 年度で、社協を退職することになりました。難病指定もされている妻の持病が思わしくなく、東京の主治医に見てもらうための距離の遠さが、次第に私たち夫婦にとって過重になってきました。今の内に、病院に出来るだけ近いところへ転居し、新しい生活に挑戦しなければならないと決断し、郷里である埼玉県狭山市に移ることになりました。

――なるほど。この春から、お引っ越しですね。

高橋先生：

実際は、引っ越し先が、4月にならないとリフォームできないそうです。戦争で、建築資材が集まらないようですね。ですから、引っ越しは5月のGW明けになりそうです。

――でも、これで「引退」ではない、という事ですね。

高橋先生：

はい。引っ越していった先でも、釜石でしてきたのと同じように社会で仕事をして人々の必要に答え、信頼関係を結び、その信頼を土台に福音を証していく伝道を続けます。実は「想像出来なかった方法で岩手との関係も続くのだ」ということが分かってきました。「社協を辞める。関東に引っ越す。」となった途端に、「キリスト教のことを、教えてほしい」「祈ってほしい」「宗教のことを話したい」という方が、次々と現れてきたのです。今、「岩手宣教の二ページ目が開かれ始めた」と感じています。今から、まさに新しいことへと挑戦してみたいと思っています。

――なるほど、そのことは、また後ほど、お話しいただきたく思います。それでは、松崎先生、自己紹介をしていただけますか？

松崎先生：

はい。私は、川上先生と、教誨師（刑務所等に収容されている人々の信教の自由を保障するために働く宗教者）として、現在も一緒に奉仕をさせて頂いております。高校生の頃、米国からの宣教師によって始められたバイブル・プロテスタント基督教会という小さな教団の中で救われ、育てられました。



若い頃は本田技研関係の会社に勤めていましたが、24歳の時に召命を受けて献身した次第です。そして実は、高橋先生とは、ずいぶん前に何回もお会いしていました。私は1985年から87年まで、杉並区にあった古い時代の聖書神学舎で学んでおりました。その時、高橋先生は、浜田山キリスト教会の

副牧師でしたね。それで、神学生の頃、私は先生のお顔を何度も拝見していたのです。

今、私は出身地の熊本で牧師をしています。2016年の熊本大震災の時に少しばかりボランティア活動に参加しました。さらにその後、2020年に熊本（人吉・球磨）水害がありました。熊本県南部としては過去最大の水害となりました。私の住んでいる地域全体が被災地となりました。私が神学校卒業後に最初に着任して15年間奉仕をさせて頂いた人吉聖書教会と旧付属幼稚園が水没しました。その人吉聖書教会を、九キ災（九州キリスト災害支援センター：九州全域をカバーする超教派のキリスト教ネットワーク）が支えてくださいました。私もボランティアに本格的に参加させていただきました。ちょうど私は60歳になっており、個別の教会に専従する立場から離れ、牧師がいない教会を巡回して説教奉仕をする役回りをしておりました。それで、平日は案外と自分でスケジュール調整が出来たのでボランティアに勤しむことが出来ました。



そうして1年くらいして、ボランティアに区切りが来た頃に、高橋先生同様に私も、社共からオファーを受けたのです。仕事内容は被災者と行政を繋ぐ「地域支え合いセンター」と呼ばれる場所を拠点にして、「仮設住宅を回り、被災に関する困りごとを聞き、見守る仕事」を依頼されました。以前から私はデイサービスの施設で働き、ヘルパーの資格も持っていましたし、教誨師という立場で傾聴という事に努めてきました。そうしたところを用いてもらえたのかも知れません。

つまり、ボランティア活動をしてから、今度は被災者の方々と直接の関わりを持つ働きに進んだ、という事なのです。それは大変でありつつ実にやりがいのある働きでした。聞くところによると、近年の「阪神淡路」から「熊本地震・水害」まで、多くの大災害を経て、被災者の方々に寄り添う面では、日本の

福祉も完全ではないにしても成熟してきているそうです。特にその中で、東日本の経験が生きているように感じています。

——高橋先生の釜石でのお働きをお知りになって、やはり社共で働くお立場として、
どんな感想をお持ちになりまか？

松崎先生：

私自身の働きは、ボランティアのときを含めて、僅か3年間でした。その間、水害の現地報告会を開催して下さった東京の教会が、私を講師としてお招きくださいました。その会合で、高橋先生の釜石でのお働きについて話題に上がりました。私と高橋先生の働きの類似性を指摘しておられた方がいたのです。でも、社協では私の働きは、たったの2年です。高橋先生は7年も労された。すごいな、と思います。



釜石での「サロン活動」でギターを弾いている高橋先生

今回、川上先生から「東北ヘルプ」のニュースレターの記事をお分かち頂きました。本当に興味深く読みました。高橋先生は現場で被災者と行政の狭間に立ち、忍耐強く対応されてきたことが書いてありました。私も、被災者の仮設住宅の玄関先でひたすら苦情や行政への文句を聞きつつ、頭を下げるが多かった事を思い出しています。

2.

——お二人は「社会福祉協議会」という公共機関で職員となり、その働きを通して牧師としての役目を果たされました。高橋先生は、その働きを「街の牧師」と言っておられますね。

高橋先生：

私の直接の上司で、私に職員になるように最初に声をかけて下さった「Kさん」が、そうした言葉を私にかけて下さったのです。いつも、二人だけになった時に、「Kさん」はキリスト教のことを聞きながらののです。ある日、「教派のこと」に話題が移りました。「私は、今、特定の教会で奉職していないので、あまり直接に関係ないのですが・・・」と申し

——松崎先生も、この春に社共のお仕事はお辞めになるのですね。

松崎先生：

2月後半に、上司の方々とよく話し合いました。結局、2022年3月までと定まったのは、つい先週のことです。

社協からオファーを受けた当初、当然ですが「大水害から被災者の再建が進むと、支え合いセンターとしての部署は縮小されて行きます」と伝えられていました。確かに再建が進んで行く事はとても良いことだと思うので、「人員調整の必要がある時は、まず私からお願いします」とお伝えしていたのです。現在私には3~4箇所の牧師の居ない教会を巡回する役目もあるので、時間的・体力的にもちょうど良いタイミングだったと思っています。

——日本基督教団の諸教会の中では、「献金」だけで教会を維持することの無理を自覚し、むしろ積極的に社会の必要に答えて行くことを志して、幼稚園などの「付帯施設」を運営・経営するケースが、この50年間、たくさんありました。でも、半世紀ほど経ってみると、その「社会の必要」が変わってしまっていて、それでも幼稚園などの施設は続いて行き、結局、「教会が縮んで施設が拡大する」という現状に至っているところが多くあります。社会の必要に応じて働きを拡げ、また社会の必要に応じて働きも整理する。それは、とても難しく、でも、やり遂げないといけないことです。お見事、と思いました。

上げると、「いや、高橋さんは、釜石の牧師だよ」と言ってくれたのです。

そのとき、はっとしました。「牧師を牧師として決めるのは、誰なのか」ということに、気が付かされたのです。つまり「あなたは街の牧師だ」と、住民に認めてもらえることこそが、実は、一番大事なことだったのではないかと。そう思いました。

——かつてフランスには「労働司祭」という神父様がいて聞きました。労働者の姿をして、トラックドライバーなどの労働に従事しつつ、労働者と共に生き、そして、労働者の生活に合わせてミサを上げているそうです。「なぜそんなことをしているのか」と聞かれたとき、ある労働司祭は、にっこり笑って「キリストの噂が絶えることのないためです」と答えたそうです。そんなことを、思い出しました。

松崎先生：

実に、「街の牧師」あるいは「釜石の牧師」という言葉は、すごい、と思います。私も、フランスの「労働司祭」と同じようなこととして、イギリスに「産業牧師」と呼ばれる方がいると聞いたことがあります。普段は世間一般の労働に従事し、日曜日には教会で説教をするそうです。もちろん、そこにも限界があるそうですが、でも「その地域に根差す・認知されている牧師」という可能性の大きさを考えさせられます。

私も、熊本の地に何十年も暮らし、教会だけではなく旧教会付属幼稚園のお手伝いをし、さらには市内にあるミッション教団の小さな聖書キャンプ場の管理もしております。熊本（人吉・球磨）水害のとき、ボランティアに参加したら、本当に被災地域の方々や顔見知りの皆さんが、喜んでくださいました。教会付属幼稚園の卒園児や保護者に、避難所や仮設住宅などで社協の人間として会うわけです。その時に「松崎先生、牧師を辞めたんですか？」とも聞かれますが（笑）——それでも、「いや、そんなことないです。被災の大変な中でも、とにかく再会できて嬉しいです」と、お伝えできる。そのことを通して、何年も教会から離れていた方と出会える。その中から、また教会に足を運んでくださった方もいるのです。

——「街の牧師」という可能性ですね。

松崎先生：

社共で働いていると、そうした事を少なからず経験するのです。公的機関としての社協ですから、もちろん宗教は「ご法度」です。それでも、みんな、「松崎は牧師だ」と、知っておられます。「うちの社共には牧師がいるぞ」と自慢（笑）される方もおられました。

そして、そこに面白いことが起こるのです。

たとえば、熊本（人吉・球磨）水害のためにボランティアに来てくださった一つの団体が、託されたミッションを終えられて、引き上げる、という事になりました。社協事務所では有志が「感謝を表すために社共として何かできないか」と、みんなが自然と話し合いを始めました。ちょうどそのころ、そのボランティア団体の代表者が同じボランティアの女性スタッフとこの被災地で結婚していました。しかも結婚式を挙げずに籍を入れただけ、と聞かされており、みんなが話し合ったそうです——「サプライズで結婚式を挙げてやろう」——「でも、結婚式をどのようにすれば良いだろう？」——「そうだ松崎がおるぞ」——と。それで、私に白羽の矢がたちました。むしろ私は「宗教的な事柄は問題にならないか」と心配したのです。でも「大丈夫な方法」を、みんなが考えてくれました。実に楽しく、形式ばらずに、「サプライズ結婚式」が行われました。私は聖書の言葉をプリントして出席者全員に配布し福音も語ることが出来ました。誓約の儀式も「本式」で執り行いましたが、特に牧師のサイン入り「結婚証明書」は、ことのほか、喜ばれましたね。



——なるほど。そうした「街の牧師」として、心がけるべきことは何でしょうか。

松崎先生：

社共の仕事をする中で、「生の牧師を見たのは、はじめてだ」と、何人もの方から、言われました。そうした中で、私が肝に銘じていることが、一つあります。生身の姿で「イエス様のことを伝えること」です。御霊の働きがなければ、人は救われない。人間の理論では、人が救われることは有り得ない——そう私は信じています。一人でも多くの人に、イエス様を伝え、御霊の働かれる素晴らしい出来事を見たいと願っています。刑務所や少年院などで行う教誨師の働きでも同じなのですが、「それで、何人、救

われましたか？」と聞かれることがあります。そう聞かれると、胸が痛みます。そういう事ではない、と思うのです。私は公的な場で福音を語ることができる恵みに、意味を見出しているのです。

——刑務所や少年院で活動する「教誨師」の働きも、まさにその通りですね。

松崎先生：

はい。例えば教誨師の場合は、宗教へのある種の期待をもって、法務省の施設が、宗教者を迎えています。教誨師は昔、国家公務員だった時代もありました。矯正教育では出来ない部分に信仰による力への期待も、あるのでしょうか。

私がいつも、二つの聖書の箇所を心にとめています。「すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょう」というガラテア書の聖句と、そしてヤコブ書の「行いのない信仰はむなし」という聖句です。ボランティア活動を始めた当初、私は「教会関係者」への働きに集中していました。それは、今でも正しいことだったと思っています。ただ、そこを起点として、ボランティアや社協の働きを通して多くの方々との出会い、次第に私は教会関係者以外の方々へも「奉仕をさせて頂く機会」を拡げることができました。そのようにしてイエス様のことを広く伝えることが、自分の働きの大切な部分だとも教えられたのです。

——高橋先生、松崎先生のお話をお聞になって、いかがでしょう。どう思われましたでしょうか。

高橋先生：

まったく、賛成です。私は「被災者の中で働く」という活動を続けています。あるいは「それは伝道ではない」と言われるかもしれませんが——教会の仲間から「何人洗礼を受けたのですか」と聞かれることも、実際、あるのです——そして、反省するのです。私も「そういう質問」をしてきた、と、反省するのです。

「伝道」とは、もともと何だったのでしょうか。それは、もともと「福音（良い知らせ）を伝える」ということだった、はずです。それを私たちは矮小化してきたのではないかと、私は反省しています。つまり「統計的な数字に表れないと意味がない、

つまり、失敗だったのだ」と、そういう矮小化が起こっているのではないかと。「伝道」を平板化して、単純化してしまっていないか。その結果、自分自身が力を落とし、がっかりしているのではないかと。それが、結局「福音宣教の失敗」が語られている現状につながっているのではないかと。

つまり、基準を見るポイントが間違っているのではないかと。私たちの救われた福音の内容を小さくしてきたから、人々が興味を持ってくれなくなったのではないかと。と、そう思うのです。

——松崎先生のお話と、響きあいますね。

高橋先生：

はい。まさに「生きて見せる」ことが、福音を伝える最上の方法だと、私も思うのです。「生の牧師を見たのは初めて」という事は、ほんとうに重要です。「生きているクリスチャン」を見るのは初めて、という経験をしている被災者が、たくさんいます。そこに可能性があると思うのです。

「信じていることを条文化して、概念を伝える」ということが先に来るのではなく、その「信じていること」を生きること——。

キリストを信じて救われるといったいどうなるのか。その事を、怒り・よろこび・笑い・涙を共にしながら、伝えること——。

「クリスチャン」とは「キリストが住んでいる人」のはずです。その人を通して、キリストが現れること。それが証だと思うのです。つまり、信じた結果、人はどう変えられるのかを、まず、生きて見せる。生きた人が生きた人と出会って、生身の人を通して、福音が伝わる。その後、あるいは質問をしていただいたら、その後、条文化された言葉を語ればいい。それが順番なのではないでしょうか。

——結局「順番」が、ずっと、逆だったのかもしれませんがね。

高橋先生

はい。見せる・感じさせる・触れさせるということがあって初めて、人は話を聞いてくれるものです。そして、教える・伝える、という事へ進む。それが段取りのはずだった。それが逆だったから、日本宣

教は思わしく進んで来なかったのではないでしょう
うか。もしこのままであれば、また延々と、同じこ
とが繰り返されます。それを変えたい。

福音は、福音に相応しいやり方で伝えられて、初
めていきいきと力強く伝わっていくと思います。福

3.

――そして、今、高橋先生は生活の場を、岩手県の釜石から、関東へと、移されます。

それでも、まだ、この釜石での働きが、確かに続くのですね。

高橋先生：

はい。まさにこれから、実践を続けます。今、そ
の実りを見始めているのです。

と言うのも、実はこの春からも「二か月に一度」
は宮古（釜石から北に50km）の教会へ、お手伝
いに行くことになったのです。

あるいは、「引っ越すまでできるだけ回数をとっ
て、ご飯を一緒にして聖書を教えてほしい」と言っ
てくださる方が起こされています。

また、長く釜石での聖書を学ぶ会を続けてきまし
たが、これを「止めないでほしい」という声が上が
り、結局、オンラインで継続する、と決まりました。

――また、松崎先生も、社共の職員を辞されて、新しい年度へと踏み出されますね。

松崎先生：

このオンラインでの話し合いに、不思議な神様の御
業を見ている気がします。つまり、「つながって行く」
という不思議です。もうずいぶん前に出会った高橋先
生と、同じ現場を共有して、今、再び出会うことがで
きました。その様に、一つひとつが無駄にならず、次
へとつながって行く。

諸教会を巡回する牧師として、私も2023年度の奉
仕が続きます。そこに、私の「この2年」の社共での
働きが生きてくるのだらうと、励まされます。実に「こ
の2年」は恵みでした。

そして、思い出すのです。2016年の熊本大震災のと
き、川上先生が、はるばる宮城から物資を熊本まで運
んで来てくれました。その時最初に支援が届けられた
のが、熊本東聖書キリスト教会でした。全国からたく
さんの支援を受け、破壊されてしまった礼拝堂も主の
憐みで復旧しましたが、その中で、その牧師先生は疲
れ果て、体調を崩されました。今、その教会を一昨年

音は人格から人格に伝えられるものだと、そう考え
るようになりました。

ですから私は、松崎先生に、大賛成です。そうす
るときに効果的に伝わっていくと思うのです。

これらのことは「私が社共を辞める」と決まって、
それから起こった変化です。「街の牧師」として働く
機会は、むしろ増えてきた。「生きて見せてきた」こ
とは、確かに、成果を得ていると思うのです。

実は、先月くらいまでは、この地を離れることに
空虚さを感じていたのです。それが今は、力を得て
います。今日、松崎先生と話して、いよいよ、力を
増し加えられている気がします。神様は、道を拓い
てくださると、そう感じているのです。

から私が巡回してお手伝いをさせて頂いております。
こうして、2016年の川上先生のお働きも、今の私の働
きと結びつく。一つひとつを結び付けるのが神様の働
きだと思います。その業を見せていただいているのだ
と思うのです。

私たちには先のことはわかりません。でも、このつ
ながりが続いて行くことは、はっきりわかる。人知を
超えた神さまのご計画を、そこに感じるのです。



熊本東聖書キリスト教会の献堂式。
前列左から三番目の後ろに、
松崎先生が写っています。

――本日は、本当にありがとうございました。

「雄勝」の壁の前に立って

——「復興」の意味を考える——

東北ヘルプは、2014年から「キリシタンツアー」の組み立てに取り組んできました。それは「被災地の交流人口」の減少に直面した中で生み出されたアイデアでした。

「東北の被災地の近くには、
キリシタンの殉教地があるではないか」

と、多くの方に教えていただき、仙台白百合女子大学の協力を得て「東北キリシタン研究会」も立ち上がり、次第にアイデアは具体的になってきました。

- 「被災地」を長い歴史の中に置いて見ること。
- そうして、「復興」ということを改めて考え直すこと。
- 更に、そこから
「歴史」への新しい見方を手に入れること。

そんな可能性が、「キリシタンツアー」にはあると、だんだん、分かってきました。ツアーは、年に5回ほど、毎年手探りで、催行されて行きました。

そこに「コロナ」がやってきました。「交流人口」は、いったん、完全に、途絶えてしまいました。そこで、私たちは「改めて計画自体を洗練させる時間を得た」と（やや強がって）考えました。

「歴史」あるいは「キリシタン」について言えば、「物語」の意味について、突き詰めて考えてみることを始めました。前号（「ニュースレター」クリスマス号）では、その詳しい報告をいたしました。そしてそれは、その後、「公開講演会」となり、また「読書会」へとつながっています。

そして「被災地」と「復興」について言えば、私たちはこの春、その現実をはっきりと見つめる機会を得たのでした。特に「石巻市雄勝町」という地域が、私たちに「現実」を突き付けてきました。「復興事業が完了した先に、町が消滅する」という事が、本当に起こるのだ——そう教えてくださったお若い方と、出会いました。そして、その現実と真正面から向き合う若者を、静かに支えている「支援者」にも、会うことができたのでした。

ここに、そのお二人のインタビューを掲載します。

インタビューには、石巻広域ワイズメンズクラブの清水さんにも加わっていただきました。清水さんは、「雄勝」に出来上がった「超巨大堤防」を間近に見て、言葉を失っておられました。「どうしてこんなことに・・・？」という思いを抱いて、お二人のお話を聞いてくださいました。



雄勝の防潮堤。高いところでは8mを超える高さの壁が、雄勝湾を囲んでいました。

「復興」とは何なのか。あるいは「復旧」という事の意味を、私たちは十分に理解していなかったのではないかと。そんなことを考えさせられる対話となりました。ぜひ、ご覧ください。

左 公開講演会と読書会のチラシ。
講演会は、録画があります。読書会は、月一度行います。
ご希望の方は naoya2naoya@gmail.com まで、お知らせください。

物語の中の慶長遣欧使節
黒い常長・白い常長・サンファン号

とき 2023年2月18日(土) 10:30~12:30
ところ 仙台市民活動サポートセンター
セミナーホール、6F 仙台市青葉区一番町4-1-3
(地下鉄本線「広瀬通駅」西5番出口すぐ)

参加料 500円 (資料代)

オンライン (Zoom) で受講希望の方は以下のGoogleフォームから
お申し込みください。 <https://forms.gle/>

主催 東北キリシタン研究会 (TEL:090-8920-5422)
後援 仙台白百合女子大学 カトリック研究所

主催 仙台キリスト教書店 2023.3.18 (土) ようスタート!
村田でもオンラインでも

**遠藤周作
生誕100年記念 読書会**
『侍』を読む

2023年2月27日に生誕100周年を迎える
遠藤周作の著作を
ナビゲーターの村上高敏さんと
共に読みましょう

定員50
遠藤周作『侍』テキストは各自ご用意ください。
仙台キリスト教書店で随時定価と併せて販売します。
オンラインでの申込も可能です (要申込)

参加費 500円 (資料代・送料込)

日時 毎月第3土曜日 10:30~12:30

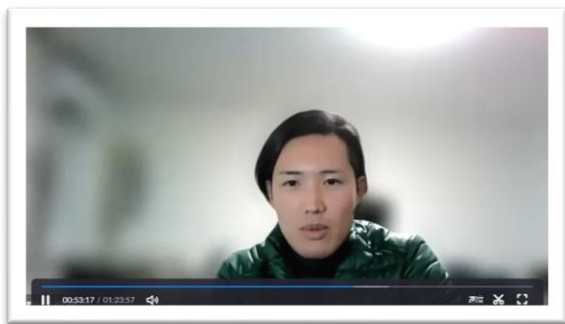
会場 東北教区センター「エマオ」
3階大ホール (仙台市青葉区1-13-1)

お問い合わせ・オンライン参加申し込み
TEL 022-222-0990 (火~)

——最初に、みなさん、自己紹介をしていただけますでしょうか。

阿部晃成（あきなり）さん：

34歳です。石巻市雄勝町出身です。雄勝地区の中心部で「町の電気屋さん」をしていた家で生まれました。浜の人ですから、新鮮な海産物などの「現物」で支払いがなされる、そんな土着の自営業の家に生まれ育ちました。



震災があって、津波が来まして、私たちも、家族と一緒に、一晩、文字通り、漂流しました。それでもありがたいことに、一家七人、全員助かりました。本当に多くの方々に、助けていただきました。また、その時に見た両親の姿に、大切なことを教えてもらったと思いました。そうした経験があって、私も地域の人々と共に「復興」に携わりました。

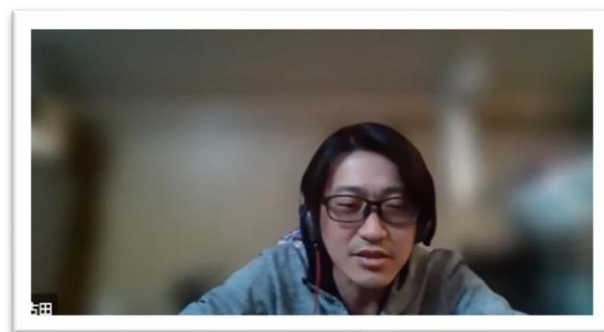
そして「高台移転」などの問題と向き合うなかで、復興が進むことで人々が雄勝に戻れない、という驚くべき現実を体験しました。その挫折の経験の後、自営業者として雇用を作りたいと願い、地元でまた努力しましたが、権利関係で躓きました。心が折れたところで慶応の大学院に進み、修士号を取って、宮城大学で、地域にかかわる人材育成にかかわっています。

今年からは、大学の勤務を減らし、雄勝に戻って、地域活動に従事する体制を整えつつあります。

古田康祐（やすひろ）さん：

44歳です。名古屋出身です。18歳で東京に出て音楽活動をし、東日本大震災の際は物資の支援から始め、その後、雄勝町や気仙沼に歌いに行きました。そうした活動を7年ほどの続けた後、歌いに行く機会も減っていく中で「このまま行く機会がなくなるのは何か違う」と個人的に思いました。その後、「復興応援隊」という制度があることを知り東京から宮城へ移住し

ました。4年間、地域新聞の制作や地域イベントのお手伝いを、雄勝から少し離れた飯野川という場所に住みながら活動しました。昨年春からは雄勝町の波板地区に住みながら「ここでできることは何か」ということを探して「エリアコーディネーター」となり、地域の困りごとの相談に乗り、支援団体さんを訪問してお話を伺っている毎日です。



清水弘一さん：

はじめまして。今日はみなさんのような「お若い方」とご一緒させていただけますことを、ほんとうにうれしく思っています。



私はYMCAとワイズメンズクラブの活動の中で、雄勝にもかかわりを持たせていただきました。青少年の健全育成にかかわるのが「YMCA」です。その活動をサポートし、地域の支援活動をするのが「ワイズメンズクラブ」です。この二つの組織が、仙台・石巻・宮古にボランティアセンターを作って、世界中のネットワークをつなぎ、一つの支援拠点となりました。そして、今から約7年前に、私たちは石巻地域でこの活動を継続するために、新しいワイズメンズクラブを作ったのでした。そうした立場から、皆さんのような若い世代の方々が、甚大な被害を被った地域で頑張っておられますことを、本当に素晴らしいと思い、尊敬の思いを抱いています。



—古田さんは名古屋・東京からおいでになり、被災地をたくさんご覧になったのですが、どうして、この「雄勝」に拠点を設けられましたでしょうか。

古田さん：

どうでしょうか・・・本当に、ここで出会った「人」が、素晴らしかったのだと思います。復興に向けて頑張っている地元の人が、たくさんいます。その人たちの思いがあるからこそ、私もここで何かできないかと思いました。私は、雄勝の人が、大好きです。「復興」という活動の中で、いろいろな体験・経験をさせていただいています。

—「若い世代」のお一人である阿部さんは、20代で、「復興」の現実と向き合われました。

阿部さん：

本当に、若い世代が、何人も、頑張っているのが雄勝です。概ね、マリンスポーツを含む「海関係」の仕事で、頑張っておられます。あるいは「奇人変人」と思われる人たちかもしれません。でも、私は、そうした人々に、刺激を受けているのです。

私たちの世代の「戻るきっかけ」は、やっぱり様々なのですが、でも「地域に戻る」というよりは、むしろ「家を継ぐ」という感覚ではないかと思います。まず何より「漁業権」があります。それは「一子相伝」が基本となっているのです。それで、東京や仙台でも十分にやっていた人が、雄勝に帰ってくるのです。



——その意味では、大きな可能性があるかもしれませんね。

なにしろ、石巻の人々は仙台へ、仙台の人々は東京へ、
どんどん出て行ってしまっ、そして「戻ってこない」のが、普通なのですから。

阿部さん：

はい。海の仕事も、決して楽ではないのです。たとえば今は、ホタテ養殖が3年も不作で苦勞されています。自然環境の変化は、大きく厳しい。けれど、それでも生活は成り立っているのが漁業関係者です。そこには、確かに世代交代が起こっているのです。

清水さん：

今の話のを伺い、不思議に思いました。石巻地区においては、ボランティアで来た人の5パーセントくらいしか、もう、残っていない、という現実も見てきたのです。お二人のような方がおられることは、本当にうれしい。それで、質問なのです。「外から来た方」が、この土地の魅力を感じて残り、地元とうまくなじむ、そのためのコツは、あるのでしょうか。

古田さん：

私の場合は、「雄勝の人々が好きだから」残れたのだと思います。この土地の人々は、世代を問わず、まっすぐで、まじめで、真正面から傷つき、悩んでいます。そういった人たちと一緒に、何かできたらと思っています。

阿部さん：

実際「腹が立つこと」は、数えきれないほど、多くあるのです。合わない人もいる。でも、「地域に住む」という事は、そういう事だと思っています。とにかく

——それでも、現実には厳しいですね。

阿部さんは「復興事業が完了して、町が消えた」と、はっきり指摘しておられます。

阿部さん：

津波で被災した3千人のうち、雄勝町内に戻れたのは高台移転での数百名ほど、津波を免れた大須地域などを併せて、千人の町になりました。「2千数百名」の方がふるさとに戻る事が出来なかった。そうした状況で「残った千人で頑張ろう」という残酷なスローガンが語られています。その「2千数百名」の方々の多くについては、「出ていったのだからもう関係ない」となってしまった。雄勝町から車で一時間もかかからない場所に住んでいるにも関わらず、です。そして、震災前であれば年に数度開かれるお祭りに、地域を離れた出身者が参加することが当たり前であったにも関わらず、です。この分断こそ、災害そのものだと思うのです。

妥協しながら、生活を成り立たせて行く。お祭りも一緒に作る。一緒に戦う事もある。街中と半島部で、それぞれ団結して対抗したりする——ただ、でも、「なぜ、自分たちの世代が、こんなことをやらねばならないか」と、思わないでもない。行政に思いを阻まれ、失意のうちに土地を離れた人も多いのです。それを見た外の人々は、驚きながら、でも、結局「学識経験者」は行政側についてしまう。その他の人々も、傍観している。だから私たち若い世代が孤立しながらでも声を上げることになる。

——そうした若い世代を応援する古田さん、
ということですね。

古田さん：

どうでしょう・・・でも、僕は、どんな人とでも、かかわろうと思います。とにかく自分のペースで進めているのです。キーマン的な人よりも、現場のスタッフの声を大事に聞いています。実際、雄勝町は小さく、一人ひとりに向き合えるサイズなのが良いところだと思います。そこに、リアルなものがあると思っています。

この土地を「悪くしよう」と思う人は、一人もいません。でも、思いがぶつかり合う。それで、いつらくなる人が出てくる。それで私は、「そういうことがあってはいけない」と思って、できることをしています。丁寧に、小さく、日常からの関係性を基盤にしていけば、きっと、展望もあると思っています。

清水さん：

私たちは、名振地区に「津波の教え石」を設置しました。「ここまで津波が来た」ということを知らせるための石碑です。その時、地域の皆さんは協力して「津波石碑公園」を作ってくれました。私たちも、かかわりのある人全員のお名前を石に刻むようにしました。そうして、またいつか、みんなが戻るきっかけになればと願ったのです。

その後、しかし、私たちも厳しい現実にはぶつかりました。

地理的に言って名振の反対側にある雄勝湾地区にも、同じ「津波の教え石」を設置してほしいと、要請を頂きました。しかし、話が進まない。住民の意見が割れて、結局、だめになり、そして、要請してくださった方は、雄勝を離れたのでした。そうしたことが、あちこちにあるようです。

例えば、今年の3月5日、東日本放送で「防潮堤が残したもの：海の町の巨大な壁」というテレビ番組が放映され、YouTubeで配信されていました。たいへん、ショックを受けました。特に、その番組に出てきた硯石の職人さんが、「雄勝はもう、ふるさとではない」と言っておられたことが、印象に残っています。



【字幕付】石巻の「浜」の物語8：「浜の中心だった名振湾」（次回は11/26公開予定の「十三浜の相川」です）

YouTube で、津波の教え石を、
清水さんが紹介しています。
右の QR コードから、ぜひ、ご覧ください。



番組の YouTube は、右の QR コードから
ご覧いただけます。



阿部さん：

あのテレビの番組は「防潮堤」を巡って故郷を離れる人を取り上げていました。私は「高台移転」を巡って人が離れる現場を見てきたのです。

「復興災害」という言葉があります。1995年の阪神淡路大震災以来、ずっと言われてきたことでした。「生活再建するための復興」ではなく「経済的な動機に基づいた、町を再開発するための復興事業」が行われてしまう。そうした悲劇が、雄勝で繰り返されたのです。「復興プランに、住民側が合わせろ」という、物事の順序が逆になった、酷い話になっていました。それで、町が消えてしまったのです。

阪神淡路とこの雄勝との違いは、さらに深刻な事態を生み出しています。つまり、ここは少子高齢過疎の地域です。つまり、再整備をして大阪のベッドタウンとなった阪神淡路の被災地と違って、雄勝は、本当に大変なことになった、という事です。

清水さん：

雄勝には、本当にたくさん、漁港がありますね。そして、それぞれに独特のコミュニティがある。それを「高台移転へ」とした。それが、机上の空論だったということですね。地域の人々が何を考えていたか、それこそが大事だったのに、それを無視する結果となった。



——そうした現場を静かに見つめてきた古田さんは、どう思われますか。

古田さん：

難しい問題です。でも、個人的なことですが、私自身は、「復興」というものをあまり意識してここにいるわけではありません。ただ、困っている人がいれば、何かできないか？と考えて出来ることをしています。今、ここにて、日常を見て、充実していきたい。楽しめるような場所を作りたい。集会所に行って歌う、といったことをしています。そんな中で聞こえてくる住民さんの声の一つひとつを大切にしています。そんな活動を続ける中で「自分の生活を建てられるか」が、これからの課題です。

——つまり、「行政」や「復興」といった大きな挑戦も大事だけれど、楽しむことが大事だ、という事ですね。そうした中で、いろいろな声が聞こえてくる。その声の中に、たとえばあの「防潮堤」は、どう聞こえてきますか。

古田さん：

「防潮堤」の話は、まったく聞こえてきません。ですから、阿部さんが先頭に立ってその問題を伝えてくれている、ということは、本当に大きなことだと思います。



雄勝湾にそそぐ
大原川の河口部でも
巨大防潮堤が
完成していました。

阿部さん：

結局、大人たちは、損をしたいとは思わないのでしょうか。「仕方がない」という感じだろうと思います。他方で、世間一般からは「被災地にどれだけのお金を使っているのか」という声もあるのです。しかし、勘違いしてほしくありません。この「お金の使われ方」は、私たち地元の思いにそぐうものではなかったのです。それなのに「自己責任」ということを言われれば、「それは違う」と言わないといけません。

きっと、間違いなく、これから「防潮堤」の修繕や維持にかかわって、また「お金」の話が出てきます。その時、「自己責任」と言われれば、私たちが苦むことになる。このことは、もう、目に見えているのです。年配者が黙っているなら、私たちが、発信を続けなければならない。

——そうした中で、見事なウォールアートが出来上がりつつありますね。

阿部さん：

まさに、あのウォールアートで、もっと激しく本当のことを表現してほしい。
防潮堤を破壊するような絵画が描かれるべきだと、そんな気もしているのです。



阿部さん：

実際、投げられた予算を考えるなら、どうしても、「この復興は失敗である」と言わなければなりません。本当に多くの方が「もう、ここにはいられない」と思い定め、出て行ってしまいました。もはや地域の体質のようにして、そうなっているのです。この失敗を続けてはいけません。そのためには、失敗を認めて、方針を変えなければなりませんと思います。

——そのために、どんな未来を目指すべきでしょうか。

阿部さん：

まず、地域を離れた方と、残った方が、協力して、つながりを作り、生業が起こり、当たり前に戻っていくことを目指したい。若い世代の方々が、雄勝で再挑戦できるようでありたい。再挑戦の意思をお持ちの方も、決して少なくないのです。しかし、そのための障害があります。その障害を取り除きたい。そういう事を考えて、私自身も「雄勝に戻ろう」と決意したのです。

清水さん：

その目指すところは、本当に正しいと思います。その上で、私は、あの完成した「防潮堤」を見て、びっくりしたのです。雄勝から出て行った人々も、あれを見たら、びっくりするはず。今後、その衝撃から、また何か、大きな変動が生まれる気がする。

その変化の動きを、私たちも、応援したいと思う。

それにしても、離れた人々は、あきらめてしまったのでしょうか。その実態を知りたいと、強く思われます。



——阿部さんは、この「復興の失敗」の研究を続けて行きたいと志しておられますね。

阿部さん：

はい。私は来月、雄勝に戻ります。私が故郷に戻るのには、そのためでもあります。私は、かつての「当たり前」を取り戻したいと願っているのです。

つまり、若い世代は「田舎は嫌だ」と思って、都会へ出て行く。けれど、20代半ばくらいから、Uターンする人が多く出てくる。その様に、時間が経つと、人は変わります。戻りたい、と思って戻って来てから、またその後、やっぱり都会に出て挑戦したいと思なおす人も出てくる。実は、それが震災前の雄勝の「当たり前」の姿だったのです。そこまで復旧したい。そうすれば、展望が拓けると思うのです。

清水さん：

ぜひ、応援したいと思います。ふるさと納税などは、重要なツールになると思うのです。

阿部さん：

雄勝町には、実は、外部に応援団が多いのです。いろいろな工夫をして、その貴重なつながりを活用したいと思っています。

古田さん：

実際、雄勝には、本当に素晴らしい人がいます。硯石の職人さんが素晴らしい作品を作っています。雄勝は素晴らしいところです。自然も、本当に素晴らしい。浜もあり、山もあり、沢もある。



阿部さん：

その風景が、「防潮堤」に切り刻まれている。その厳しさが、かえって際立っていると思います。あるいはそこに、全国の方々に訴えるべき「みんなの課題」が、はっきりと見えるのではないかと考えています。

——そして、雄勝には素晴らしいバラ園（ローズファクトリーガーデン）もありますね。そのバラ園は、失われた故郷の美しさを自分たちで取り戻そうという思いを込めて、ゆっくり成熟している、と、伺っています。

大切なことは、カタツムリの速さで

と、聞いたことがあります。厳しい現実の矛盾に痛みながら、しかし、「大切なこと」が、確かに、今、ここに起こっているのだと思わされています。

今日は本当に、ありがとうございました。



雄勝の硯上山（けんじょうさん）

眼下には雄勝湾を臨み、南に牡鹿半島と金華山、北に志津川湾、そして西には奥羽山脈を遠望できます。

追悼：似田貝さんのバトン

東北ヘルプ代表 川上直哉

社会学者の似田貝香門さんが、亡くられました。その連絡は、ふっと、届いたように思いました。そのお顔、そのお声が、臉に浮かび、耳に響いてくるような、そんな気がしました。

2013年、似田貝さんが、私たち「東北ヘルプ」を訪ねてくださいました。とても熱っぽく、「このままではだめなのだ」と、助力を要請くださいました。「阪神淡路大震災から続く歩みが、もう一步を進まなければならない。そのために、力を貸してほしい」と、そうおっしゃったのです。

そして、東北ヘルプが事務局となって、不思議なワークショップが始まりました。社会学者と、宗教者と、心理職の方、そして現場の支援者が集まって、「本当のことを語りあう会」となりました。そのワークショップの名前は「出会う会」となりました。その最初の回の資料には「趣旨説明」が記してありました。それは以下の通りでした。

今後の継続する支援を支えることを目指し、以下の願いを込めた会を開催する。

a. 「2011年の震災による到達点」の確認

95年の震災は様々な意味で「支援」に関わる者の転機となった。今次の震災はどうか。
95年の転機との比較を通じ、現在の到達点を確認したい。

b. 「職能ボランティアの出会い」の提供

報酬を制度的に定めた「職業」があり、その職によって得られた能力を用いてボランティアに従事する「職能ボランティア」がある。この視点に立ち、多職能者の出会いの場を提供したい。

c. 「支援者を支援するネットワーク」の展望

以上を重ね合わせることで、支援者が互いに支援し合う基盤を創り出せればと期待したい。

とりわけ、震災から2年余が過ぎた今、「自立」への動きが本格化していることを鑑みるに、「地域」あるいは「ネットワーク」の重要性を感じさせられる。地域に職能者ボランティアが広域点在していることに、今後の「自立」を良いものとする鍵があるだろう。この会に、大きな期待を持っている次第である。

「出会う会」の特徴は、「現場」の本当の話をする、ということでした。そこでの会話は文字に起こされ、参加者に共有されましたが、それは「部外秘」とすることを、互いに約束しあいました。矛盾の中に葛藤する思いが語り交わされ、互いに驚き、あるいは歯噛みし、そして「復興」と呼ばれる事柄の本当の姿を見つめる時となりました。

「出会う会」は2018年10月の「第27回」まで続き、そして似田貝先生が病臥され、会は止まったのでした。

原子力災害の現場はもとより、津波の被災地でも、「復興」の欺瞞と矛盾は、はっきり見えています。でも、それを理解することは、とても難しいことです。その難しい課題のために、「出会う会」は、大きな力となりました。通常、現場の報告は「成果」を語るものとなります。「失敗」を語るものではありません。支援者への業績報告が、そのほとんどだからです。「出会う会」では、そうした「成果報告」は無用とされました。むしろ、どこに壁があり、どのような矛盾があるかが、現場の事柄として語られました。当然、それは具体的な「誰か」への批判となります。その苦みも含めて、話し合い、検討しました。

検討して見えてくる事柄は、絶望的な現実です。どうしても「制度」や「組織」あるいは「社会」が立ちふさがり、当初の志を曲げざるを得なくなる。それが現場の現実です。それをやり過ごしながら、なんとか、少しでも、目的を達したい。でも、目的に近づけば近づくほど、「制度」「組織」「社会」が大きく立ちふさがってくる。そして、いつしか支援者は疲れ果て、撤退する。それまでの「成果」を眺めて満足せざるを得ない、そんな支援者たちの姿——阪神淡路大震災以来、ずっと、そうした支援者たちの姿を見つめ続けてきたのが似田貝さんでした。東京大学の社会学の教授として、一人の研究者として、そのような「支援の現場」を生み出し続ける社会とは何であるかを、じっと、考え続けておられました。

似田貝さんが亡くなった、との報を聞き、私は「出会う会」の資料を改めて読みなおしました。似田貝さんの声が、はっきり聞こえる気がしました。その作業の中で、似田貝さんが関根清三さんに宛てた手紙を見つけました。「2008年07月13日」の日付が書かれています。『旧約聖書と哲学』という書物から得た強い印象を述べておられました。その中で、似田貝さんは、「旧約聖書の思想の中には『負から正への転移』の折り返し地点がある。それを自分も見つけてみたいと努力しているが、まだ、見つからない。そこに自分の課題がある」ということを、熱っぽく、述べておられました。

津波があり、原発事故がありました。発災当初、すべての人が、「これは何とかしなくては」と、思い定めたはずです。でも、今、「復興によって町が破壊された」という現実があり、あるいは、「復興という夢で、現実を覆い隠す」という非道が展開しています。人間の善意は、折り重なるとき、このような「負」を積みあげるのか——そう、ため息が出ます。

でも、そこで挫折するのでもなく、中断するのでもなく、撤退するのでもなく、「穏やかに持続して耐え抜く」という姿があり得ることを、似田貝さんは、阪神淡路の現場の10年間で、見出しておられました。上記の「2008年07月13日の手紙」の中で、似田貝さんは、そのことをはっきりと書いておられたのです。そう言えば、しばしば「もう、支援活動は終わりかもしれない」と思い詰める軟弱な私に、似田貝さんは、確かに、何度も、そのことを語っておられました。

しかし同時に、似田貝さんの内側では、そこで「行き止まり」になった、という思いがあった。そこから更に「負から正への転換」が起こる「折り返し地点」があるはずだ、と、そうお考えになった。それがつまり「2008年07月13日の手紙」の時点であった。そして、2011年の震災があり、2013年の「出会う会」の始まりがあった。——そういう流れであったようです。

「負から正への折り返し地点」を探したいと、真剣に、「出会う会」を続けてくださった。その似田貝さんは、もう、この地上におられません。それが、どうしても、信じられない思いです。でも、似田貝さんの声は、聞こえる気がするのです。バトンは、渡された。そんな気がします。私も、その「折り返し地点」を探します——そう、私は、静かに聞こえる似田貝さんの声に、ゆっくり、応えています。 (了)



石巻市の津波被災地にある
障がい者施設「べてるの風」にて

風化に抗うために1：「福島記憶」写真展を

2023年1月8日（日）から29日（日）まで、3週間にわたって、「飛田晋秀 写真展・福島記憶」が、石巻で開催されました。2022年10月に「三日間」行われた写真展を受けて、「もう一度・もっと長期間、写真展の開催を！」というお声上がり、開催されたものでした。その実行委員会のみなさまに、写真展終了後、お集まりいただきました。また、「一年に20回は原発強制避難地に行き、定点観測のように写真を撮り続けている」という写真家の飛田晋秀さんにも、オンラインでご参加いただき、コメントをいただきました。

以下、その様子をご紹介します。

（2023年2月15日 川上直哉 記）

——まず、自己紹介と、そして今回の写真展の感想を、実行委員の方から、お願いします。

佐藤清吾さん（石巻市の沿岸部在住）：

私は、漁民の独りとして、震災のずっと以前から「原発はやってはならない」と主張してきました。この写真展について知り、多くの人に「現実」を知っていただくための最高の手段だと思って、関わってきました。今回、盛会に終わったことは、本当に良かったと思います。

この「原発」という問題は、短期に情熱を注いでも効果の出ない問題なので、息長く、取り組むことが大事です。疲れしないで、続けましょう。これからも変わらず、やっていきたいと思っています。

つい先日、東京電力株式会社と日本政府が私たちの住む浜にやって来て、「汚染水」の海洋放流について、説明と懇談会を開催しました。私は辛らつに意見を述べました。私の話を聞く時のあの人たちの様子を見て、「きっと、計画通りやるのだろう」と思いました。ですから私は「けっして、放流を肯定していない」ということを、いよいよはっきり申し上げたのです。これからも、これからも、あきらめずに、言うべきことを言おうと思います。

近藤武文さん（石巻市の市街地在住）：

写真展では連絡窓口をさせていただきました。みなさん、お世話になりました。以前、仙台で写真展が行われた時、「原発立地自治体の石巻でやりたい」と思ったのでした。「やっとできた」という感じがあります。「まず、福島のことを知っていただき、思いを持っていただきたい」と思っていました。

昨年10月に石巻で行った写真展には、多くの人

が来てくださりまして、たくさんの思いを知らせてくださいました。「来場者のみなさまと話ができてよかった。収穫があった」と思いました。「そういう機会がいろいろ続くといいな」と思っていましたら、今回、阿部さんが、新しい企画を立ててくださいました。協力したいと思い、ご一緒しましたが、肝心の開催期間に「コロナ」になってしまい、ほとんどお手伝いできなかったことは残念でした。

会場に設置した「感想ノート」を見ますと、「いろいろな思い」があることが、改めてよくわかりました。こうしたことを続けて、福島のみなさまとも思いを共有して行きたいと思っています。とにかく「思いを巡らすこと」をしたいと思っています。

小原真喜子さん（仙台の近く・多賀城市に在住）：

私の感想も、近藤さんと重なります。ぜひ、石巻でやってほしいと、ずっと、思っていました。原発事故が起こったらどうなるか、福島の実状を知ってほしい。女川原発があるので、そのことも一緒に考えたい。そう思っていたのです。もちろん、今回の「写真展」の展示の中で「そういうこと」を強く表現したりはしませんでした。それでも、石巻の人々は、感じておられました。そのことは、来場者とのやり取りで、はっきりわかりました。それが昨年10月の催事の感想でした。

昨年10月の写真展が終わり「石巻の他の所でもできないだろうか」と考えていましたら、阿部さんが「10月の催事を経て、もう一度、ぜひ」と言ってくださいました。実に行動派の人に出会えたと、感

激しました。「人の心を動かす力」が飛田さんの写真にあるのだな、と思われました。

昨年に引き続き今回も、飛田さんのトークセッションが行われました。飛田さんをご自身の思いをストレートに伝えてくださいます。きれいごとではなく、生々しい言葉に触れる機会となったことを、感謝しています。理屈ではなく、生(なま)の現実が、人を動かすのだと思いました。

長沼利枝さん(石巻市の内陸部に在住)：

今回の写真展で、この地域・石巻の特徴を、見てくださる方の「しぐさ」に見た気がします。アンケートや感想文から、一層、そのことを実感しました。新聞報道では「原発再稼働容認」の世論が過半数になったそうです。そうしたことも、写真展の参加者とお話できました。人々の心の中に「原発と向き合う思い」を提供できた写真展だったと思います。

阿部理恵さん(石巻市の市街地に在住)：

皆様、本当に、お世話になりました。

昨年10月の写真展に行きまして、「これは伝え続けなければ」と思いました。思いばかりだったので。飛田さんに突然電話をしました。すると快く、協力をしてくださいました。ありがたかったです。

今、電気料金が値上がりし、原発も再稼働する、という中で、小さな声でもあげることができた。いろいろな考えのあることを、社会にアピールできた。そのことを大切に思っています。

この会をやったことで、友人が増えました。様々な分野の方とお会いできました。このことを、大切にしたいと思います。

地元の人たちが、写真展が終わるときに「寂くなる」と言ってくださり、女川原発のこと・逃げられないという現実を、語り合っておられたことが、印象に残りました。



上 会場の様子。来場者には「ハート」の付箋紙に感想を書いて頂きました。

左 振り返りの会の様子。飛田さんがオンラインで参加されています。

——ありがとうございました。それでは、飛田さん、今回の写真展への感想をお願いします。

飛田晋秀さん(写真家・福島県三春町在住)：

とにかく、宮城県の方の熱意を感じています。というのも、昨年から3回も写真展が開催されましたし、今年はさらに数回、開催される予定で、しかもその一回は町役場が直接に関わっての開催となるのです。当然、今後、この流れに対する反動も起こるでしょう。それでも、一人一人の「点在」していた思いがつながり「線」になっていくことを実感しています。これが大事だと思うのです。近県では、山形県酒田市の方が訪ねてくださって「写真展をしたい」と相談ください

ました。近く、新潟県と東京都と山形県で写真展を行います。つながりは広がっているのです。そうした中で、この石巻の写真展は、重要な意味を持ちました。

今までの流れを見てみると、たとえ12年経ったとしても、簡単に人の心は変わらない、という事なのだと思います。ですからおそらく、今、原発関係者は焦っているのではないかと思います。そしてもうすぐ、以前のように「お金」を使って人心を掌握する努力をするのだらうと思います。

——皆さんも、今回の写真展を振り返って、どんなことをお考えになりましたか。

近藤さん：

今回、地元の「ラジオ石巻」さんが、二回もこの写真展のことを放送してくれました。ラジオを聞いて写真展に来てくれた人もいたのです。特に二回目の放送は、写真展が終わった後のものでした。飛田さんの講演の内容を10分くらい、紹介してくれました。かなりまとまった内容で、「私たちは、この現実を知らなくちゃいけない」という感想が語られていました。「立派な放送だ」と思ったことです。実際、地元の放送局を見直す機会となりました。

小原さん：

ラジオを聞いて来場された人は多かったと思います。参加者の中には自分の震災体験を語りだす方もいました。原発という現実を見つめて「お金の力の怖さを知った」という感想も語られていました。

阿部さん：

「女川原発のことは、逃げられないという現実だ」と語り合っておられた方もいました。少しずつ、分かってもらえたと感じた。一方で、「原子力や放射能は自然界にもあり、怖くない」という情報を普及させようとする努力に、税金から大変なお金も使われていることは、とても気がかりです。

電気料金の値上げを理由に原子力発電を容認する人が増えるのは残念です。また、原子力発電所の延長使用を閣議で決定し、国民の声を聴かないことは、許

——具体的に、原子力災害の強制避難地となった現場では、今、どんなことが起こっていますか？

飛田さん：

政府のお金が入っているところでは、盛んに「自然放射能」ばかり語られます。放射能の詳しい内容等、詳しいことは、語ろうとしません。そうした「研修」がなされているのです。「放射能の安全神話」が打ち立てられようとしている。

そうした中で、「帰還の問題」が、大きくなっています。どうして戻らないのか、という声が上がってきているのです。マスコミは、その現実を報道しません

してはいけないことです。「ノー」の声を継続してあげる努力が必要だと思います。

小原さん：

まじめな人ほど、政府のことを信じてしまいますね。素直すぎて、疑うことを知らない人が多い。

長沼さん：

「まともなこと」をしようとしたら、お金が出ない。国の言う事を聞くものだけに、お金が出る。そんな現実と向き合ってきた気がします。

小原さん：

そうした中で、揺るがしがたい事実を示すのが、この「飛田晋秀写真展」だったと思います。現実と向き合うチャンスが、そこにあったのだと思います。



し、調べもしないのです。つまり、たとえば——除染して「0.5 マイクロ Sv/h」になり、家の中で「0.2 Sv/h」となった*。でも、家の裏には「1 マイクロ Sv/h」の所もあった——と、そういう現実が、「帰還先」にあるのです。その現実を指摘して、「それで住めるのか」と報道の方に尋ねますと「そんなことがありますか…」という答えが返ってくるばかり。今は、事実を伝えることが、とても大切だと思うのですが、まったく、そうできていません。

*通常「0.27 マイクロ Sv/h」程度から、どのガイガーカウンターも強い警報音を鳴らし、退避を呼びかけます。

風化に抗うために2：じんのあい『星の輝き、月の影』 完結

じんのあいさんのマンガ『星の輝き、月の影』が、第二巻をもって、完結しました。

その第一巻は、「ニュースレター」2021年イースター号で、ご紹介していました。まず「東北」の重い現実が、しかし希望と共に、描かれる。そして、そこに原発事故が重なる。そんな物語でした。そこに描かれる「現実」に、深く心を掴まれたような、そんな思いがした。そんな読後感をもって、第一巻をご紹介したことでした。

※東北ヘルプ「ニュースレター」2021年イースター号

<http://tohokuhelp.com/jp/secretariat/36/index.htm>

第一巻には、「避難生活」から「生活再建」へと向かう現実が描かれていました。それは具体的に「お金」のお話であり、あるいは「介護」の苦労であり、そして「放射能」の厄介さでした。



「危ない」と言っていればよい、わけではない。

でも、「安全だ」と言えば、嘘になる。

だから黙っていると、

いつしか「なかったこと」にされてしまう。

そんな現実が、原発避難民を包んでいます。たくさん、いろいろ、工夫をし、努力をし、苦労を重ねますが、それでも、問題はびくともしない。そんな現実が、描かれるのです。

タイトルの「星の輝き、月の影」という言葉の、特に「星の輝き」に、この物語は希望を託します。それは「時間」を間に挟んだ希望です。思い返せば、古来、「星」は導きと希望のシンボルでした。昔、ダンテは絶望の中で星を見失い、地獄を抜け出て星を見つけました。欧州の船乗りは「ステラ・マリス（海の星）」を見てそこに聖母マリアを思い出し、「青」でイメージされるマリアの導きを得て航路を定めたのです。そしてこの物語『星の輝き、月の影』の中でも、八方ふさがりの中、しかし最後に、「星」が希望を示します。

タイトルの言葉の残りの部分、つまり「月の影」は、いったい何だろうと考えています。この物語には「汚染されずに残った泉」があり、あるいは「伝

統の手すき和紙」が継承されています。そのそれぞれが、新しい生業（なりわい）に繋がる胎動を示して、物語は終わります。近くにある光源。確かな手触りがあるけれど、でも、そこにはいつも、影が差す。その影ごと、足元を見定める灯となる——そんな意味が「月の影」にあるかな、と思われました。

2011年から12年経ちました。あの年に「小学1年生」になった私の娘は、今年、高校を卒業しました。もう子どもたちの過半数は「あの日」の記憶がない。これからもっと、風化は進むのでしょうか。そのことを哀しく思う私たちがいます。でも、その私たちは今、「原子力災害」を忘れてしまっていないか。あるいは「分かっている」つもりになっていないか。冷笑していないか。考えさせられます。

津波と、原子力災害と、二つの違いは、どこにあるのでしょうか。おそらくそれは「物語」の数の違いにあるように思われます。物語らなければ、風化は加速する。物語は、いつも、空想と誇張と偏りと思込みを含みます。そうして初めて、物語は温かみを持つのです。そして、むき出しの権力と政治に触れるのが、「原子力災害」です。だから、温かみを持った物語が語られにくい。だから、風化が極端に進む。本当は、巨大津波よりもずっと、「次の原発事故」の方が、起こる可能性が高いのに……。

完結した『星の光、月の影』を改めて読みなおし、思います。これは、どこまでも空想の中の「物語」です。でも、だから、大切なことを伝えてくれます。痛みと共に、人の思いを、伝えてくれます。それは、私たちに、風化に抗う力を与えてくれる。そんな気がしました。

風化に抗うために、一人でも多くの方に、お読み頂きたい物語でした。（2023年3月14日 川上直哉 記）



じんのあい
『星の輝き、月の影』第二巻
2023年3月 小学館
1480円（税込）

会計報告

収支計算書

2022年4月～2023年3月 期	2023.2.28現在
	(単位：円)
	計
会費収入	5,000
献金収入	5,745,334
事業復活支援金	1,100,000
預金利息	13
収入計	6,850,347
法定福利費	1,232
新聞図書費	314,007
通信費	372,079
支払手数料	59,971
外注費	500,500
事務費	958,277
広告宣伝費	669,821
旅費交通費	1,225,447
燃料費	298,423
会議費	312,636
支援費	1,000,607
支出計	5,713,000
収支差額	1,137,347
前期繰越	1,057,032
次期繰越	2,194,379

献金集計表(累計)

2023.2.28現在		
	計	
	件数	金額
2011年	256	120,271,287
2012年	592	165,673,327
2013年	619	138,543,737
2014年	651	29,420,520
2015年	629	17,973,940
2016年	692	14,465,518
2017年	750	12,491,525
2018年	649	10,796,867
2019年	522	8,836,872
2020年	521	6,788,613
2021年	608	7,507,178
2022年	465	7,393,616
2023年	103	845,718
累計	7,057	541,008,718

東北ヘルプは、発足当初から、
「献金は、祈りそのものである」

と語り交わしてきました。そして、
お預かりした献金を、できるだけ早く、
支援のために使う事を、いつも、
申し合わせてきました。

気が付けば、本当に大きな金額を
被災地のために用いさせて頂きました。

そして、今なお、みなさまからの
貴いご委託を賜っていることに、
改めて、心を引き締めます。

ここに改めて、感謝を申し上げます。

東北ヘルプ代表 川上直哉



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍泉尾小隊士官）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は全て 2022 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com

携帯電話 090-1373-3652